

サッチモのこの素晴らしき世界 録音から50年！

8月5日(土) WJF例会で超レア・サッチモ映像集を上映

この素晴らしき世界・・・何と素敵な響きの言葉 作詞作曲者、サッチモに歌わせた両者に脱帽

この素晴らしき世界・・・何と素敵な響きのする言葉だろう。特にこの戦争とテロが身近な時代には、なおさら心にしみる言葉だ。英語の持つ響きも素晴らしい・・・ワット・ア・ワンダフルワールド！！！！ありふれた言葉のようで、よく考えるとこの上なく素晴らしい深い意味をふくんでいる。シンプル・イズ・ベスト・・・単純明快、簡単明瞭こそ最高。こんなテーマでこのような最高の曲を作詞作曲した作者、ジョージ・D・ワイスは最高だ！！そして、サッチモにこの曲をうたわせようと考えた名レコード・プロデューサー、ボブ・シール（ボブ・シールは、ジョージ・ダグラスのペンネームで、作曲者にも名を連ねている）の感覚に脱帽。

10年ほど前、ロックの大スター、ロッド・スチュアートがスタンダードを歌った企画がヒット、アメリカで注目を集めた。ワンダフルワールドの入ったアルバムはヒットチャートNo.1となった。スティービー・ワンダーのハーモニカの伴奏も素晴らしく、サッチモとは違った、ギャルウケのする雰囲気の中のロッドの歌い方・・・でもやっぱり、ロッドには悪いがルイ・アームストロングが歌ったあのバージョンには遠く及ばない。

“人生の苦しみと”いう授業料を払ったサッチモ そうでなければよいジャズも音楽もできないんだ

「サッチモのワンダフルワールド！！！！
どうしてサッチモの音楽は良いんでしょう？」

名ドラマー、ジミー・スミスさんに聞いてみたことがある。カウント・ベイシー、エラ、サラ、エロルガーナーと活躍したジミーさんとは8年間、東京ディズニーランドのニューオリンズ広場で共演させてもらい、いつも楽屋でこんな話を聞かせてもらっていたのだ。

「いいかいタヤ〜マ（ジミーさんは私の名前はトヤマじゃなくて、タヤマだと思っている）、“授業料”を払わなければ、良いジャズも音楽も出来ないんだよ。“人生の苦しみ”と言う授業料を払わなければネ・・・」黒人として人種差別を体験してきたジミーさんの言葉だけに、胸を打つものがある。

バトルフィールド“戦場”と呼ばれるほど犯罪と暴力に溢れ

たニューオリンズのスラムに生まれ、12歳で少年院に入所。そこでトランペットを教わったサッチモ。その声は少年時代から石炭売りや廃品回収、新聞売りをやって鍛えられた声・・・。確かにサッチモの払った“授業料”は十分すぎるほどだ。サッチモほど“この素晴らしき世界”を歌うにふさわしいアーティストは、いないのかも知れない。

提示された録音料金はLP1枚分の500ドル！ マネージャーは「2万5000ドルいただきます」

サッチモのあまりにも有名なワンダフルワールド。意外なことにレコーディングされた時は、こんなヒットになるとは全く思われていなかったと言う。記者ローレンス・ベルグリーンが書

いた本“ルイ・アームストロング―その驚くべき一生”の中に、こんな話が載っていた。

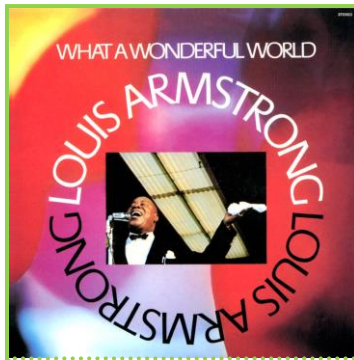
「この曲をサッチモに持ってきたのは、かつてサッチモ／エリントンの名アルバムをつくったボブ・シールで、当時はABCレコードのプロデューサーだった。サッチモはすっかりこの曲が気に入り、ストリングスや管楽器で楽団編成が大きくなり予算がないと言うことで、音楽家組合が取り決めた最低の録音レート250

ドルでレコーディングをOKする、と言うほどの惚れ込みようだった。ところが、ABCの社長のラリー・ニュートンは、サッチモもこの曲もプロデューサーのシールも大嫌いだった。そんな訳で発売当初、特別のプロモーションは一切されず、アメリカでの当初のセールスは1000枚にも満たなかったという。しかし、英国では、アットという間に60万枚を売る大ヒットとなった。

慌てたニュートン社長はワンダフルワールドのLPアルバムとして発売するため、追加の曲の録音をサッチモのマネージャーに依頼してきた。提示された録音料金はLP1枚分でタッタ500ドルだったそうで、ドコまでも締まった社長である。マネージャー（ジョー・グレイザー）はニタツと笑って、2万5000ドル頂きます、と答えたという

本格的な永遠のヒットとなったのは1987年 映画「グッドモーニング・ベトナム」に挿入で

この曲がアメリカで改めて、『本格的な永遠のヒット』となったのは、20年以上経った1987年、映画グッドモーニング・ベトナムに挿入されてからである。（外山喜雄）



ABCレコードのLPから

